

昭和六十二年五月十五日 塾祭記念講演

「人類史における現代の意義」

(財)日本モンキーセンター所長 京都大学名誉教授 河合雅雄先生

「ご紹介いただきました河合でございます。数年前に前川理事長と対談する機会を得まして、前川さんの非常にユニークな人生観や経営哲学に大変感銘したことを覚えております。このたび和敬塾の理事長に就任されて、今日は創立三十三周年の記念だそうでございますが、招かれてお話できるのを大変うれしく思っております。

私は今ご紹介いただいたように、人類学という学問をやっているんですが、もちろん人類学といってもいろいろな学問分野がございます。中でも私は、「人類の進化」ということを通じまして、人間というのはいったいどういう動物だろう、というようなことを研究し、考えてきているわけです。人間というのは非常に不思議な動物であります。現在、地球上には一三〇万種の生物があるだろうといわれますが、アムールバライオン、チンパンジー、そういういろいろな動物たちを見ていっても、人間という

のはやはり非常に不思議な動物だと思わざるをえないんです。一番知能が優れ、一番高等な動物だということになっておりますけれども、どの動物よりも人間が優れているかということになると、私はそうは言えないという感じがするんです。

今日、私は皆さんに直接お役に立つような話はできません。ですけども、若い人に「大きな目」をもっていたきたい、と思うんです。私などはもうそろそろ老年でございますから、そのうち死ぬわけですが、今から二十年三十年、あるいは五十年後にどうなっていくかということは、本当に予想できないんです。そういう時代に皆さんは生きていかれるわけですから、私は皆さんに対して期待もこめながらお話をしたいと思っております。

今日は「人類史における現代の意義」と、ちょっと変な題をあげましたけども、いま我々がどんな時代に生きているのかという

ことをしっかりと知ることが、非常に大事なことだと思えます。ひいては、自分とはいったい何か。これが、非常にわかりにくい。自分のことは自分が一番知っているはずなんですけども、わかりにくい。一番簡単な例をいえば、自分の顔は自分では見えませんね。鏡がなければわからない。人間というのはだいたいそういうものなんです。自分を見るためには「他」を見る必要があるということです。同じように、いま我々が生きている時代がどういうものなのか、これはとてもわかりにくいことだと思っております。長い人類史の中でも、今が一番わかりにくい時代のような気がいたします。「未来」というものをなんとか予測していきたくて、誰もができるわけですが、科学ですら未来予測の能力をずいぶん失ったと思います。科学技術庁が十年後、二十年後の予想というようなことをやりますけども、この予測は技術面だけに限ってもずいぶん外れて

まいます。ましてやそれ以外の、人間の精神活動、社会がどう変わっていくか、などということはなかなか予測できません。

我々が今、なぜこんなにわかりにくくなっているかといいますと、ひとつは文明のスピード、あるいは加速度が非常に高まってきているということだと思っております。ですから、いま我々は本当に豊かな物質文明に包まれて、文明を享受しております。けれども、これは例えばこんなことではないかと思っております。例えば「危険」ということです。我々は歩くわけですが、走るによりスピードを増します。走っておれば、何が危ないかみんなわかる。スピードを増すために自転車を発明する、自動車を発明する。自転車であれば何が危険か皆さわかるわけですね。危険に対応することができません。それから、飛行機を発明する。プロペラ機、これもかなり危ないんですけれども、まだ人間の力で自由にできます。けれども、ジェット機。皆さんもジェット機にお乗りになったことがあると思っておりますが、あそこに乗っていると、本当に揺れませんし、おいしい機内食が出てまいりますし、非常に快適な環境です。外を見ても、成層圏ですから雲もないし、飛んでいるという実

感も何もない。けれども、実は音速に近いようなスピードで走っているわけですから、ほんのちょっとしたトラブルがあれば全員が死んでしまう、というようなことが起こるわけですね。現実にとまどき起こっています。けれども、乗っている人は、そういう危険について、何が起こるのか、あるいは起こっているのか、まったくわからない。非常に快適な空間にいるという事実しかわからない。いま私たちが、この巨大な文明の進歩の中で生きているというのは、そういう状態に非常に似ていると思っております。だからこそ我々は、どういうふうには人類が危険に晒されているかということもよくわからないわけです。

現在、今まで人類が遭遇したことのないような大きな事件が起こっていると思えます。おかげさなことを言うように思われるかもわかりませんが、私の学問の性質として、人間というものを考えていくのに、どうしても進化のレベルで考える。人間というのは、だいたい五百万年から六百万年ぐらい前にこの地球に生まれた。つまり、サルから進化してきたわけですね。それ以来続く人類のなかで、何度か大きな革命がありました。けれども、現代という時代は、人類

史の中で一番大きな変革期にあると思っております。

例えば、我々が食糧を得るために一般的な農業や牧畜。あれは食糧獲得の大きな元手をつくったわけですが、わずか一万二〇〇年前に人類が発明したのです。今のアフリカのブッシュマンの人たちやピグミー族がやっているような狩猟採集生活は人類誕生と共に始まりました。五百万年の中の、わずか一万二〇〇年前に農耕牧畜が始まった。それから急激に人類の文明が発達したわけです。これは人類史のなかで非常に大きな革命ですね。それから、皆さんがご存じの産業革命。工業というものを人類社会に取り入れるようになった。これも大きな革命であります。六十万年、八十万年の時点でもいろいろと革命的なことがあるんですが、すべて人間が発展していくステップとしての大きな変革だったと思えます。

けれども、いま出会っている大きな革命というのは、ひょっとしたら人類が全部滅びるかもわからない、そういう変革だと私は思っています。とても怖いことだと思っておりますね。例えば、ちょっと思いだせば簡単なことであって、本気になってソ連とアメリカ

力が核戦争を起こせば、地球上の人類どころか多くの生物が滅びてしまふ。ちよつと歯車が狂えば本当に起こることですね。あつてはならないことですけども。公害、教育の荒廃、あるいは人間関係がスタスタになつてお互い疎外されていくような状況。そして、世界中の人がずいぶん飢えに苦しんでいる。だいたい一億二千万人ぐらいの人が飢えているといわれます。四百万人から五百万人ぐらいが現実に餓死している。

これはなぜかという、大変な人口増大の結果であります。現在、世界の人口は五十億人ぐらいですが、この先まだ増加して、六十億人、七十億人もそう遠くない（二〇〇六年二月時点で六十五億人を突破）。なぜ増えるかといいますと、人類には捕食者、つまり天敵がないからです。例えば、原始時代であればオオカミやヒューマ、コヨーテといった肉食動物に捕食されることもあつた。武器の発達で優位に立つたあとも、ペストの流行などで人口が激減するということがあつた。しかし、技術や医療の進歩の結果、ガンやエイズで多少死ぬことはあつても、人類の天敵はなくなつたといえる。それで人口が増大したわけですね。天敵と人口の関係については、あるおも

しろい研究があります。人間ではなくてシカとその捕食者であるオオカミの研究ですが、東京農工大助教授（当時）の丸山直樹さんという人の研究ですね。丸山さんは、現在ポーランドでオオカミの生態の調査を行っています。どういう研究かというと、絶滅したオオカミを呼び戻して日本の森林生態系を復活させようという。日本で最後にオオカミが確認されたのは一九〇五年です。オオカミは、日本では害獣として捕獲、駆除されて、とうとう絶滅したわけです。その結果、自然生態系のバランスがおかしくなつて、シカが増加し、農作物や天然林などに被害を与えるまでになつた。そこに、捕食者であるオオカミを呼び戻せば、日本の森林生態系は元に戻るんじゃないかというわけですね。

それはもう、オオカミがシカを食べるといふと、哀れな感じはします。しかし、ひとつの大きな生態系というバランスの中では、食うものがあるからこそ各ポピュレーション（population 個体群）は平均化するわけですね。それで、オオカミも生きられる、ヒューマも生きられる、コヨーテも生きられる。その後の研究もおもしろいですね。オオカミがどんなシカを食っているかといつ

たら、元気なシカはまず食べません。だいたい、歳をとつたもの、怪我をしたもの、こつたものを食べているんですね。いわば間引いてもよいシカで、元気な雌鹿牡鹿はほとんど食べません。ですから、生産していくシカたちは生き延びて、毎年子供たちを生んでいく。そういうかたちで食うものと食われるものが共存してあるというわけです。ですから、動物たちの世界というものは、食う、食われるという関係であつても、お互いがうまく共存していく。食うものばかりが得しているようなことは決してないわけです。

これは少し考えれば、経済的な現象のようにも思えるんですね。例えば、日本がめちゃくちゃに輸出をして国際的な非難を被っております。ですけども、これは要するに、自分だけ得するというようなことは世の中では成立しないということだと思つたんですね。オオカミがめちゃくちゃにシカを食べてしまつたら、そのときはよいですが、シカがうんと減ればオオカミは自滅しますよ。日本はそれと同じことをしている。つまりオオカミは、シカを食べるけれども、シカが生き延びるだけのポピュレーションを残しておいてあげましょつと、そういう仕事

をしておるわけですね。そのところが大事なことであると私は思います。

それからもうひとつ、共存の例を挙げたいと思うんですが、それは熱帯雨林というところでございます。私はアフリカの、いわゆる熱帯雨林ですつと仕事しておるんですが、あれはやはり非常に不思議な世界ですね。熱帯雨林というのは、皆さんが知っているような森とちがって、ものすごく巨大な森であります。上の層を「樹冠」といいますが、この樹冠がだいたい四十メートルの高さがあつて、森林は、上層部、中層部、下層部と、だいたい六層に分かれている。熱帯雨林というのは、本当に巨大な緑ビルディングのようなものなんです。そこには、多種多様な植物がありまして、地球最大のエネルギー循環が行われるといわれております。そして、毎日の湿度はだいたい一〇〇%で、九〇%を下回るとはあまりありません。ですから、こつこつとこころはいくら木を伐つても全然平気だろうと、伐つたらすぐにわーっと生えてくるだろうと、こつ普通は思うわけです。ところが、熱帯雨林ほど脆いところはないんですね。これについては、学者もみな勘ちがいでいたんですよ。熱帯というのとは、とにかく光がいっぱいある

わけですね。熱帯雨林というぐらいだから、雨もいっぱいある。私が研究している地域はだいたい九ヶ月のあいだ雨季ですからね。雨はそうとうにある。光が充分で水がいっぱいあつたら、植物はどんなことがあつても生えるのではないかというのは、植物の生態学の初歩の考え方ですね。それで、みんなそう思っていたわけです。

一番大きな教訓はベトナム戦争ですね。ご存じのように、「枯葉作戦」というのをやったわけです。ベトナムはものすごく密林に覆われているから、どこにおるかかわからないベトナム兵をやっつけるためにやった。やつつけようと思つたら、あの木の葉を落とせばよい、という考えです。それで、枯葉剤(2,4,5-T, 2,4,5-trichlorophenoxy-acetic acid)という恐ろしい毒物を大量に撒いたわけです。そうすると、まさに「枯葉剤」という名前のとおり、木は葉を落としてしまつて、ベトナム兵の隠れている場所がみんなわかる。それをバンバン撃つ、というすごい戦争でした。当時のアメリカの国防長官はマクナマラ(Robert Strange McNamara, 1916-)という人でした。彼は数学期にものすごく強くて、当時流行っていた「ゲーム理論」(註一)で戦争をやったわけ

です。こちらがこつやると、敵はこつやる。それに基づいて数学モデルをつくり、勝つために必要な物量を投入する。ところが、ベトナム人はそんなに武器ももたないし、ゲーム理論などは知らない。ベトナム人がやるのは、まさに命を賭けた精神闘争ですね。ですからベトナム戦争は、非常におもしろいといつたら悪いですが、対照的な戦い方でおこなわれた戦争だつたと思つんです。それで、アメリカのゲーム理論と物量作戦では、ベトナムを降伏させることはできなかったわけです。強い精神力によつたものではないか、何ものによつても潰れないのではないか、そんな教訓を得たように思います。

ともかく、その枯葉作戦で四国全体と同じくらいの広さの土地を裸にしてしまったわけです。その当時は、熱帯だからすぐまた生えてくるように思っていたんですね。ところが荒地になつてしまひ、ほとんど何も生えなくなつています。それが、植物生態学者を愕然とさせた出来事でした。今でも、日本は熱帯雨林を伐採して、外国の非難を浴びています。つまり、熱帯雨林は、伐つたあとは沙漠化(註二)していくんです。なぜなのか。これは、少し考えれば当たり前の

ことなんです。すごく大きな森は、非常に生産力が豊かですから、ほとんど木の葉を落としてきます。熱帯雨林は常緑樹ですが、常緑樹も年々木の葉が落ちる。熱帯雨林は不思議なところだと言いましたが、日本の森を歩いてみますと、カサカサ落葉の音がするわけです。それから腐葉土があつて、フワフワする。それが、熱帯雨林ではまったくない。枯葉は少しありますが、ほんの少しで、あとは固い赤土です。ですから、コツンコツンと歩く。そういうところなんです。もうひとつ不思議だったのは、熱帯雨林には動物が少ないということです。なぜ少ないか、ということとはとりあえず置いておきまして、熱帯雨林にはむちゃくちゃに動物がいるところがあるんですね。それはどこかというところ、土壌、土の中なんです。土の中には多数の土壌生物がおります。土の中と上にはアリやシロアリがたくさんおつて、特にシロアリが圧倒的に多い。よく言われまますように、一平米の土地をとれば、ヒメミミズがだいたい四、五千匹、ササラダニなどの小さな虫が五、六万匹、それからセンチュウ

ネマトーダ(nematode 線虫)という微生物ですが、これは百万から五、六百万匹あるわけです。バクテリアになると、本当に無数におります。そういう無数の土壌生物がいるところに、枯葉が落ちてくるわけです。そうすると、ミミズやシロアリがいつべんに食べてしまつていく。それで排泄すると、また排泄物には栄養が残っている。それを今度は小さなヒメミミズやアリが食べていく。それから排泄すると、今度はセンチュウが食べ、その排泄物をバクテリアが食べ、栄養分、いわゆる無機塩(註三)に変えていく。そういう作業を、土壌生物やアリが嘗々とやっけていく。ですから、木の葉が落ちてもすぐに分解されて、栄養分として木に返される。木は返された栄養分を吸ってズンズン大きくなつて、また木の葉を落としてお返しをしてあげる。

このように、植物と土壌生物のあいだに共存のシステムが成り立っている。お互いにもらつて、もらつたものはちゃんとお返ししている。これが共存のシステムの原理です。熱帯雨林というところには、植物と土壌生物のあいだにひとつの生産工場ができあがっている。そういうところですから、腐葉土なんかできっこないわけですね。そこを、人間がバーツと伐採してしまうでしょう。熱帯ですから、あのさんさんとする光が地面に直接降り注ぐ。すると、土はいつべんに乾きます。土壌が乾燥すると、土壌生物はすぐに死んでしまつ。しかも、熱帯雨林の雨季は日本の梅雨とはちがいます。スコール型の雨ですから、バーツと降つてバーツとあがる。そうすると、そこに飛んできた種がみんな流れてしまつてしまいます。腐葉土であれば貯まっていますけども、赤土ですから、全部流れてしまつ。本当にどうしようもなく沙漠化していく。痩せた土地が広がっていく。ですから、熱帯雨林というのは特に脆いということをお忘れはいけません。

例えば、日本の森は世界で一番強い森だと私は思います。特に照葉樹林といわれる西日本の森林ですね。洪水があるのが地震があるのが、山焼きがあるのが火事があるのが、すぐに復元する強い森であります。そこには、腐葉土がうんと貯まっていますね。これは、いわば余分なものです。しかし、それをすべてエネルギーに換えてしまえば、と考えるのは浅はかでありませぬ。何かのときに余裕をもっている。やはりそれはとても大事なことです。腐葉土が土地の乾燥を防ぎます。どんどん栄養分をつくってくれます。そういう材料をもつ森が日本の森なんですね。

ひねくって考えれば、経済活動もまったく同じだと思っただけです。とにかく功利的に、少しでも遊んでいるものはいかん、すべて働け、という考えになりがちです。持っているものは全部出せということになる。しかし、やはり、いつでもどこかに余裕をもっている、何かの危機に対して余分なものが有効に働く、そういうゆとりが、私たちにとても大事だと思います。

動物たちはこのような共存のシステムをつくっているわけですが、もっひとつ、有名な「棲み分け」というシステムがあります。

これは私の先生である今西錦司先生（いまにし きんじ、一九〇二年～一九九二年。生態学者・文化人類学者・京都大学名誉教授）がたてられた説ですけども、簡単にいいますと、似た生活様式をもつやつが一緒に暮らすのはむずかしい。というのは、同じような生活をしているということは、餌も棲む場所も一緒なわけです。ひとつところに似たもの同士が暮らせば、うまくいかない。だから、少し離れて、自分だけの生活の場を確保する。それぞれに確保することによって、お互いの無用な競争を避ける。こういうことを動物たちはやっています。それを「棲み分け」といっております。

この考え方は、人間にも応用できると思います。よく農家で問題になっていますが、いまミカンがよい時ですけども、ミカンがよいとなれば、どこもかしこもミカン畑にしてしまおうでしょう。静岡が有名だったのが浜松に渡ったくらいならよいですが、和歌山から九州に渡って、みんなミカンミカンミカン。私はよく九州へ行きますが、あそここのミカンはダメですね。それで、ミカンの木を伐って、炭にしている。もったいないことですね。同じように、キャベツがよいとなったら全部キャベツ畑にしてしまおう。動

物の世界というのは、多種多様なものが各々の個性を活かして生きていくからうまくいく。私はこの原理が大事だと思うんですね。だから、ミカンがよいとなったときは、むしろちがうものを考えたほうがよい。これがひとつの「棲み分け」です。ただ、棲み分けというのはある意味では消極的なやり方ですね。今西先生は昆虫類でそういった研究をなさって、鳥類などに応用なさったわけですが、サルぐらい高等になるとまたちがったやり方が出てくるんです。棲み分け説を否定するわけではないんですけども、サルは棲み分けということを土台にして、なかなかうまくやり方をしております。

先ほど言いましたように、熱帯雨林では棲み分け原理がうまくいっていない。まったく棲み分け原理がないかというところではなくて、上層部、中層部、下層部、それから下生えのところ、こういうところにいるサルは種類が決まっているんです。一番上はハナジロザル、次にクチヒゲザル、下はマンドリルというヒビ、だいたいこう棲み分けしている。「棲み分け」だったら、ピチツと分かれて生活しているように思いますが、一番上のオオハナジロザルと中間のクチヒ

ゲザルともうひとつ下のサルが、一緒にグループをつくって移動しているのが、しょっちゅう見られるようになった。これは例えば、ライオンとヒョウが一緒に生活しているのと同じことなんです。「いったい何ごとか」ととてもびっくりして、長いあいだ研究して、だいたいわかってきました。それはどういふことかという、普段は棲み分けている。すると、上にあるハナジロザルは上の世界のことをよく知っている。熱帯の森は毒のある植物がいっぱいあるんですが、どれを食べてはいけないとか、上の世界についてはハナジロザルはよく知っているわけです。クチヒゲザルにカンムリザル、マンドリルというヒヒも、それぞれの世界を知っている。それぞれ知識のレパートリーをもっている。一緒にいれば、その知識を共有できるわけです。だから、一緒に行動するとき、ハナジロザルも下に来て、下の世界を知っているサルの真似をして食べる。そうすると安全なわけですね。上のほうに行けば、やはり上の世界を知っているサルの真似をする。このように、限られた知識をみんなで共同にするということをやっているわけです。

もうひとつおもしろいのは、敵ですね。地

上からはヒョウや大蛇、空からはサルを食べるクマタカなどの猛禽類が来るわけです。クマタカについては、上の世界のサルがよく知っている。ヒョウや大蛇については、下の世界のサルがよく知っている。一緒に行動するときは、ハナジロザルは上の防衛を担当して、下の防衛はカンムリザルが担当する。分担するわけですね。そのときは一緒に行動するけれども、また別れていく。そのように、資源をうまく利用して知識を共有する、こういう共同社会がサルになると出てまいります。他の動物たちにはこういう力はありません。なぜかという、サルにはやはり優れた知能があるんですね。われわれ人間はサル的一种ですが、こういう働きをうまく活かしていつ、共同に生産力を高めるわけです。

現在、「国際化」ということがやましく言われています。国際化というのは非常に多方面の解釈をしなければならぬと思うんですけども、ひとつは、日本だけがうまくやっていくことは絶対できないんですね。世界中のいろいろな国家とうまくやっていかなければならない。うまくやっていくには、つまり共存の体制をつくるには、原理はひとつなんです。それは、お互いにお返しす

る、そういう構造を備えもつことです。つまり、取れば与える。ものすごく簡単な原理ですね。これは、動物たちが長いあいだつづいてきた、共存の原理です。いくら人間は高度だといつても、この原理から離れてはまずい。そのところだけは大事にしなければなりません。そういう意味では、日本はやはり非常に優れた国だと思います。

ですから、これからの日本を世界でどのような位置につけていくかは、今の若い人が問われている一番大きな使命だと思います。先ほど言いましたように、二十年後、三十年後にどうなるかは、私などにはほとんど予測できません。極端なことをいえば、人間が滅びかけているかもわからない。そういうことが起こらないように、動物がもってきた基本的なことは忘れてはいけない。その基本に、人間のもっている本当の叡智をかぶせることによって、よい世界をつくることができる。

これは、むずかしいことだと思っただけです。動物たちにとっては、何百万年、何千万年かけてつづいた知恵を利用していけばよいだけです。ある意味では簡単です。人間は、それだけではダメです。自分たちが新しくつくっていくもの、それによって自分

をつくっていく、ということであります。そういうことを念頭におきながら、よい日本だけではなくよい世界に貢献するようになっていただきたいと、こう願っております。

以上で時間がまいりましたんで、まだまだお話ししたいことはございますが、これで終わらせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございます。(拍手)

質疑応答

質問(塾生)

サルの世界にも、同性愛というのはあるんでしょうか。

回答

それはね、あります。サルといたしまして、非常に種類が多く、現在二百種類もいるものですから、下等なサルと高等なサルとずいぶん差があります。普通はメス同士同性愛のほうが多い。ところが、オス同士の同性愛もちゃんとあります。一番はつきりしているのがゴリラですね。ゴリラは若い衆だけの集団をつくりまして、その中で同性愛の行動がおこなわれます。ただ、これは人間における同性愛の行動とは意味がちが

いますね。変な快樂の追求のために、などという要素は全然ありません。やはり、社会秩序をありのままに守っていくために、というのがひとつの基本になっていると思えますね。けれども、同性愛の行動というのは、そんなに普通に見られるものではありません。

質問(塾友)

共存というお話についてですが、私たち人間は宗教をもっているわけです。他の動物、サルにはたぶん宗教はないと思うんですけれども、宗教をもっているから、かえって人間はうまく共存していけない、あるいはできにくい部分があると思うんです。これからの世の中をつくっていくうえで、先生のお話と宗教の接点というようなことをご示唆いただければありがたいです。

回答

簡単にお答えするのはむずかしいんですが、本当はまず、なぜ宗教が要るかということとを考えなければいけないわけですね。これは、なぜ道徳が要るのかということと同じです。これは、基本的には、人間を含めた動物はすべて攻撃性という性質をもってい

るということです。人をやつつきたいという。この攻撃性は、我々の遺伝子の中に入っている性質で、除くことはできません。なぜ攻撃性をもつかといえ、今日は説明を省かせていただきますが、進化するために必要なです。そのように、必要だけでも悪い性質というのはいっぱいもっているわけですね。悪い性質はうまく抑えていかなければなりません。これを、動物たちはけっこううまく解決しているんですね。

人間の場合は、悪い性質を抑えるために、例えば友愛であるとか、道徳であるとか、宗教であるとか、そういった独特の体系をつくりました。ですから、宗教というものはいろいろなカタチがありますけども、私は人間に絶対必要なものであると思います。

それからもうひとつ、文化という面から考えなければなりません。文化というものには、すばらしく大事なものである一方、諸刃の剣でもあると思っています。すべての文化は、よい面と悪い面をもっている。地球上にいる「ヒト」は一種類だといえます。その中に黒人とか日本人とか、人種という「タイプ」がいっぱいありますね。同じタイプの連中は、ひとつの人種的な集団をつくってしまつて、ナワバリを持ち、攻撃性を内包し、

非常に排他的になりやすい。その人たちが固有の宗教をもつと、宗教とはひとつの文化行動ですが、宗教を抛りどころにして非常に排他的になりやすい性質をもっている。これは動物にはありません。人間に独特のものです。

集団の内部ではよいのですが、集団同士がものすごく戦うという結果を招くわけですから、そのあたりを充分注意して宗教とはいつたい何なのか考えなければならぬ。現代になって、初めてグローバルな人たちで宗教や文化を考える基盤ができたと思います。これは、今後の大きな問題であります。

質問（塾生）

サルなどの動物にとって、幸福というのは何なのでしょう。

回答

それはなかなかよい質問なんです。というのは、我々はみんな幸福になりたいと思っているわけなんです。人間とは何かといえば、私は幸福を目指して生きている生き物だと思います。では、動物たちに幸福はないのかといえば、「人間の願うような」

幸福はないんだと思いますね。なぜかといえますと、これも少し話が長くなりますが、動物の世界には善も悪もないんです。善と悪という世界をつくったのは人間という動物なんです。悪というものが、絶対に取り除くことができないほどあるからこそ、本当に幸福になりたいと願っていくんだと思います。簡単には申しかねますが、私が書いた本『森林がサルを生んだ』（平凡社、一九七九年）を読んでいただければと思います。

司会

河合先生、本日はどうもありがとうございました。（拍手）

註一「ゲーム理論」 利害の対立する事態にある集団の行動を数学的にとらえる理論。ゲームにおけるプレーヤーの行動様式をモデルにしたものであり、経済学、経営学、心理学、生物学、社会学、法学、政治学、論理学などに応用されている。

註二「沙漠」 降水量が少ない乾燥地帯にできる、生物が生育できない不毛の荒地のこと。岩石沙漠、礫沙漠、砂沙漠、土漠、

塩沙漠などがある。そのなかでも砂が多いものを「砂沙漠（砂漠）」と呼ぶ。

註三「無機塩」 炭素、水素、酸素以外の、無機塩類として存在する植物の生命を維持する栄養分として必要な、燐、窒素、カリ、珪素などの主要元素とマンガン等の微量元素のこと。